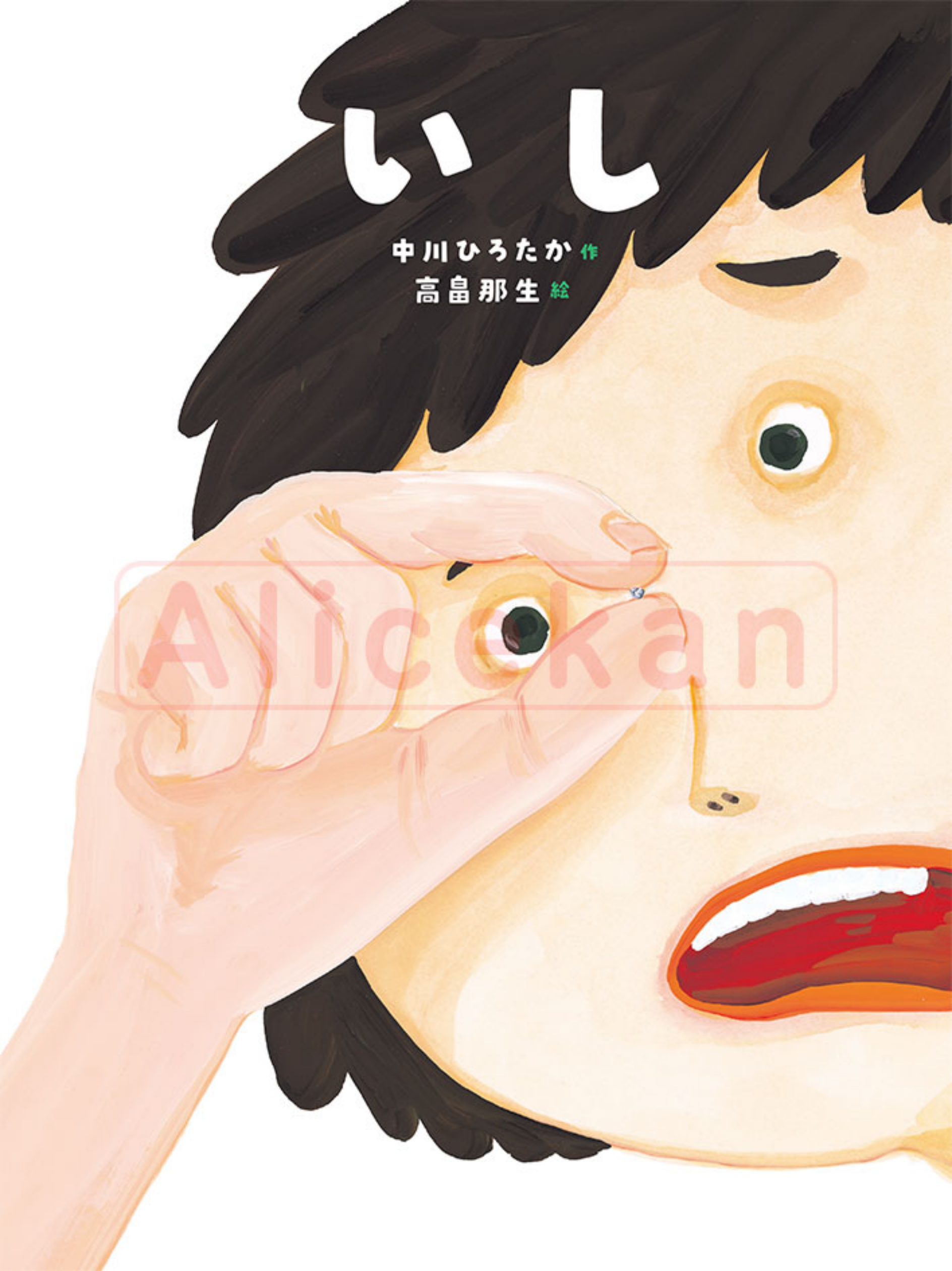


いし

中川ひろたか 作

高畠那生 絵

Aliccokan



「いし、かんだ」と ぼくが いうと、
「すなね」
と おかあさんが いった。
「あさが すいこんだ うみの すな」
「すなと いしは ちがうの？」
「いしが ぐだけて すなに なるの」

「うみの まえは どーこだ？」
おかあさんが とつぜん ぼくに きいた。
「うみの まえって、なに？ かわ？」
「そう、かわ」
「じゃ、これから かわ みにいきましょう」
「え？ いまから？」





「さ、ついたわ」

「はやっ」

ちいさい かわ。

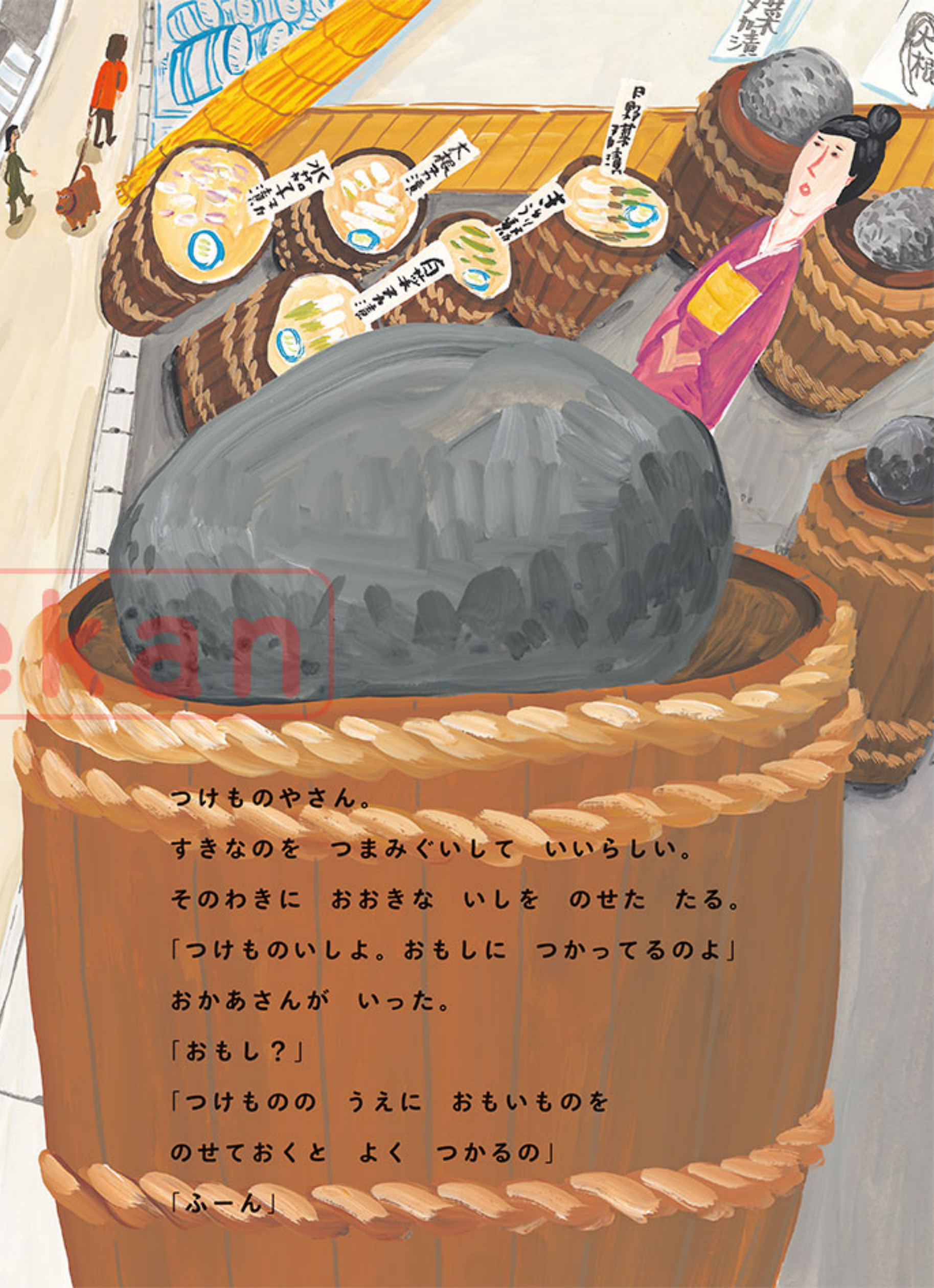
「ここが げんりゅうね」

おくの いずみから ちょろちょろ みずが ながれてる。

「このへんは、“がんばん”ね」

ぼくたちは かたい いしの じめんに たっている。

ていぼうで つりをしていた おとうさんと いっしょに
ちかくの じんじゃに いった。
じんじゃへと つづく さんどうには
いろんな おみせが ならんでる。



つけものやさん。

すきなのを つまみぐいして いいらしい。

そのわきに おおきな いしを のせた たる。

「つけものいしよ。おもしろに つかってるのよ」

おかあさんが いった。

「おもしろ？」

「つけものの うえに おもしろものを

のせておくと よく つかるの」

「ふーん」

すこし いくと おそば屋さん。

ガラスの むこうで しょくにんさんが そばを うっている。

その となりで ゆっくり まわっている まるい いし。

いしと いしの あいだから、しろい こなが でてきている。

「あれが そばこだよ。あの あなの なかに

そばのみを 入れて、この いしうすで ひいているんだ。

むかしは てで まわしてたんだけどね。

いまは でんどうなんだな」

